日本学研究

北京日本学研究中心

第十三期

外语教学与研究出版社

China

北京日本学研究中心

责任编辑：朱　琳
装帧设计：牛茜茜

¥：29.90
ISBN 7-5600-3762-3

一个学术性教育性
出版机构

网址：http://www.fltrp.com

China

K313.07
X834
13

第十三期

日本学研究

北京日本学研究中心

中国社会科学院研究生院图书馆
藏书

外语教学与研究出版社
北京

20024632

China 此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

(京)新登字 155 号

图书在版编目(CIP)数据

日本学研究 第十三期/北京日本学研究中心. —北京:外语教学与研究出版社, 2003.10
ISBN 7－5600－3762－3

Ⅰ. 日…　Ⅱ. 北…　Ⅲ. 日本—研究—丛刊　Ⅳ. K313.07－55

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2003)第 094077 号

日本学研究 第十三期
北京日本学研究中心
*　　*　　*
责任编辑: 朱　琳
出版发行: 外语教学与研究出版社
社　　址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)
网　　址: http: //www.fltrp.com
印　　刷: 北京市鑫霸印务有限公司
开　　本: 787×1092　1/16
印　　张: 23
版　　次: 2003 年 12 月第 1 版　2004 年 4 月第 2 次印刷
书　　号: ISBN 7－5600－3762－3/H·1895
定　　价: 29.90 元
*　　*　　*
如有印刷、装订质量问题出版社负责调换
制售盗版必究 举报查实奖励
版权保护办公室举报电话: (010)88817519

China

主编　徐一平　代田智明
编委会委员　谯燕　秦刚　宋金文　郭连友
清水贤一郎　德丸亚木
执行编委　秦刚
责任编委　秦刚

China

目次

特集：北京日本学研究センター2002年国際シンポジウム「進化する日本研究」

[前書き]

● 2002年国際シンポジウムについて 1

[記念講演]

● グローバル化の中の東アジアと日本研究（講演要旨） 青木保 5

[パネルディスカッション「文化“翻訳”の可能性」基調報告]

● 文化翻訳の“路線”に関する思考 厳安生 10
● 文化の翻訳は可能か——原点は「差異」の認識 森本哲郎 14
● 異なる人たちの共生と豊かな相互関係をめざす日本研究を 韓栄恵 18
● 異文化理解に向けて 羅紅光 23

[総括]

● シンポジウムを終えるにあたって 佐藤公彦 28

[分科会発表論文]

★ 日本言語 ★

● コーパス言語学の可能性と限界 田野村忠温 32
● 言語学者と言語工学者の望むコーパスの理想像 施建軍 48
● 言語研究のための情報自動抽出とその応用 毛文偉 57

★ 日本語教育 ★

● 『新編日語』について考える 周平 65
● 香港理工大学大学院専門日本研究課程の開発
——総合的日本語インターアクション能力の養成をめざして 宮副ウォン裕子 77
● 中国大学生如何学日语？——日语专业本科生“语言学习信念”调查 滨田麻里 85

★ 日本文学 ★

● 引き裂かれた翻訳詩観
——萩原朔太郎の訳詩観に見る、近代日本における翻訳問題の一側面 安智史 91
● 個別と普遍——大江健三郎の遠近法（パースペクティブ） 島村輝 104

China

★ 日本社会 ★

● 日本研究としての「企業社会と地域社会の関係性」
——従業員調査と地域調査の結果をめぐって　松戸武彦　112
● 日本の「家族」と中国の「家族」
——高齢者扶養システムとしての比較　宋金文　132
● 日本社会の「一致・調和主義モデル」への一考察
——寿老人ホームにおける衝突を例にして　呉咏梅　144

★ 日本文化 ★

● 福沢諭吉著『福翁百話』における実学思想と宗教哲学　小泉仰　160
● 从杂志《新日本》试论大隈重信的文明论与其中国观　钱昕怡　172
●「世界の日本」説——西田幾多郎の文化論　呉光輝　181

投稿論文

● 中国の新聞に見られる日本語の語彙　彭広陸　189
● 従属節中の状態動詞のテンス——会話文を中心に　羅如新　204
●《太平記》と《三国志通俗演義》　邱嶺　222
● 修養論としての『門』　王成　231
●「蜘蛛の糸」を読む
——空間設定がもたらした反転不能な物語構造について　秦剛　242
● 妇产科医生世家贺川家的家系继承——关于日本家族制度的一个实证考察　李卓　253
● 中日两国老龄问题研究概论　周维宏　262

第16期大学院論生優秀論文選

● 日本語における「言いさし」表現に関する考察
——「発話機能」と「配慮」の分析を中心に　劉雅静　277
●『和泉式部日記』における物語的方法——「噂」を中心に　高慧　295
● 公害的克服和城市的成长管理——以四日市市为例　高娜　313
● 時局評論からみた内藤湖南の中国認識——大正期から昭和前期にかけて　朱琳　334

『日本学研究』投稿規定　354
『日本学研究』執筆要領　356
あとがき　358
英文目次　359

China 此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

特集：北京日本学研究センター 2002年国際シンポジウム 「進化する日本研究」

2002年国際シンポジウムについて

2002年9月28日（土）29日（日）の両日、「2002年北京日本学研究センター国際シンポジウム『進化する日本研究』」が実施された。

一、本シンポジウム開催の趣旨

情報化をともなうグローバル化の進展は、世界的な規模での相互関係・相互認識の変容をもたらしている。この変容は「中国における日本学研究」に対しても大きな影響を与えつつあり、かつてないほどの「進化」を経験しつつある。この「進化」の渦中にあって、行く末を展望することが、いままさに求められている。われわれは知的領域の世界的規模での変容とその「日本学研究」への影響を客観視する必要に迫られている。

本シンポジウムは、そのような環境要因の変化のなかで、「中国における日本学研究」の最先端の成果を披露しあい、相互に吸収することによって、またこれまでの研究成果の蓄積層の断面を展望することによって、「進化」しつつある「日本学研究」の方向性を探求することを目的としている。

また本シンポジウムは、「中国における日本学研究」のみならず、韓国、オーストラリアなど東アジア近隣諸国における「日本学研究」の最前線の状況についても認知し、それを相互の知的共有財産として、より重層的な「進化」の可能性を探ることも目的としている。われわれは、文化的背景や民族社会を異にする「日本学研究者」たちの観点や意見の重合や錯綜のなかから、より多角的で超越的な視野をもった「文化『翻訳』の可能性」の吟味検討を試みる。

このようなシンポジウムを開催することこそが、「中国における日本学研究」のセンターとしての役割を果たそうとする当センターの使命であり、また存在証明のよりどころでもある。

二、本シンポジウム開催の状況

今年度のシンポジウムの特徴は、日中国交正常化30周年、新施設建設などの関係で日中政府から重視され、多くの参加者を得たことである。

初日の9月28日には、開幕式、大平文庫除幕式、センター新施設の上棟式、記念講演、パ

China

ネルディスカッションが行われた。開幕式には、章新勝教育部副部長、阿南惟茂日本大使、藤井宏昭基金理事長、劉徳有中華日本学会会長、田小剛教育部副司長、宮家邦彦公使らが出席した。開幕式および記念講演には300人余りが参加した。

翌29日には、日本言語・日本文学・日本社会・日本文化・日本語教育の5つの分科会が開催された。各分科会ごとに「進化する日本語研究：コーパス言語学・文法研究の現状と未来」（言語）、「文学翻訳の可能性」（文学）、「日本社会の研究と方法」（社会）、「東アジアの近代中日思想、文化交流の軌跡」（文化）、「中国における日本語教育：現状と展望」（日本語教育）といったテーマが設定され、パネルディスカッションあるいは研究発表が行われた。5分科会で60名余りが研究報告を行い、全体でおよそ300人参加し、それぞれのテーマについてかつてないほど深い議論が繰り広げられた。

三、記念講演および記念講演者の紹介

青木保氏が「グローバル化の中の東アジアと日本研究」という標題で記念講演を行った。講演時間は約90分。講演は、本シンポジウム開催の趣旨を受けて、グローバル化する世界環境における「日本研究」のあり方について、青木保氏御自身の高見を披露していただいた。

青木保氏は、昭和13年、1938年に東京に生まれ、東京大学教養学科を卒業，同大学院社会系研究科で文化人類学を専攻、日本における文化人類学の創成期を担った。その後、東洋文化研究所の助手として、東南アジアをフィールドワークの中心として研究を進め、1965年のタイ調査旅行をきっかけに、インド、フィリッピン、マレーシアなどで調査を行い、その後、ヨーロッパ、日本でもリサーチを行っている。大阪大学助教授·教授、東京大学教授を歴任されたのち、現在、政策研究大学院大学教授·主任Directorとして、文化政策·文化人類学を担当している。1994年からは、文化政策プロジェクトのチーフを勤めている。この間、日本民族学学会会長、ハーバード大学客員研究員、パリ社会科学高等研究院客員教授、中国社会科学院社会学研究所名誉教授、上海同済大学アジア太平洋研究中心顧問教授、などを歴任、国際的に活躍している。

著書は20冊あまりを出版しておられ、近著として『異文化理解』『アジア・ジレンマ』『逆光のオリエンタリズム』などがある。とくに1972年から73年にタイの国立チュラロンコン大学に留学、6ヶ月間仏僧として修行をしたさいの記録を、1976年に『タイの僧院にて』として発表している。この書物は、文化人類学の調査研究という範囲を超え、ある種の文明論あるいは文化研究へと踏み出した内容だということで、広く注目された。その後は、エドマンド·リーチやレヴィストロースなどの人類学理論の沃野についての豊富な知見を背景に、“文化”をめぐる諸問題についての鋭い分析と、見解を打ち出し続けている。最近は、文化政策の比較研究、グローバリゼーション、情報化、文化の相違、に関心を集中させておられる。

専門領域の文化人類学の著作である『儀礼の象徴性』は、1985年度のサントリー学芸賞を受賞した。『文化の翻訳』という、本シンポジウムのテーマそのものを表題にした著書があり、本シンポジウムの記念講演者として最もふさわしい方であると考える。

四、パネルディスカッションおよびパネリストの紹介

記念講演にひきつづき、「文化"翻訳"の可能性」をテーマとしてパネルディスカッションが行われた。青木保氏の司会により、森本哲郎、厳安生、韓桑恵、羅紅光の4人のパネリストが基調報告·討論を行なった。フロアからも多くの質問·意見が寄せられ、約3時間のパネルディスカッションであったが、時間の経過を感じる余裕のないほど活発で刺激的な討論が行われた。

·厳安生氏は、現在北京日本学研究センター教授。1937年生まれ。1961年外交学院を卒業、現在校に就職、今日に至る。この間に東京大学留学(1979~81)、同大学博士学位取得(1989)を経て、北京外国語大学日本語学部主任(1992~94)、北京日本学研究センター主任(1994~2000)を歴任、現在同センター専任教授。主著『日本留学精神史』は、第19回大佛次郎賞および第4回アジア・太平洋賞を受賞した。主要業績としては、『日本留学精神史』(岩波書店、1991年)、『日本人の自己認識』(共著、岩波書店、1999年)、「大正の日本留学が生んだ中国文壇の"鬼子"たち」(東京大学比較文学学会、1996年)、「"あわい"を生きる」(福岡ユネスコ協会、2000年)等がある。

·羅紅光氏は現在中国社会科学院教授。1957年北京に生まれる。西安外国語学院日露学部、陝西省工業学院基礎教育学部、日本大阪大学人間科学部を経て、1994年7月に大阪大学で博士号を取得。現在、中国社会科学院(CASS)社会学研究所《社会学研究》の執行編集長及び所長代表を務める一方、文化人類学者として東南アジアをフィールドとして活躍。研究分野はアジアにおけるNGO(NPO)。交換研究を通して、富をめぐる社会運動、ヒューマニズム(Humanism)及び価値の創造(想像)の研究に没頭している。主要業績としては、『黒龍潭:ある中国農村の財と富』(京都:行路社)、『不等価交換:囲繞財富的労働与消費』(杭州:浙江人民出版社)等がある。

·森本哲郎氏は、著名な評論家である。1925年、東京に生まれる。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院社会学科修了。1949年、東京新聞社入社。1950年、アメリカ新聞協会の招きで渡米。半年にわたり各地で新聞研究を受ける。1953年、朝日新聞社入社。学芸部員として世界各地を歴訪し、文明論、比較文化論の視点から多くの記事を担当。その後、学芸部次長、朝日新聞編集員を経て、1976年、退社。以後、文明論、社会評論、日本文化論などを中心に評論家活動を続ける。1988年、東京女子大学現代文化学部の専任教授として着任。おもに比較文明論、日本文化論を担当。1992年、同大学を退官。ふたたび著述活動を中心として活躍しておられる。著書としては、『文明の旅』『サハラ幻想行』『中国幻想行』『ことばへの旅』『詩人　与謝蕪村の世界』『そして文明は歩む』『ある通商国家の興亡』『日本語　表と裏』『日本語根ほり葉ほり』『ぼくの哲学日記』『この言葉!』『文明の主役』など多数があり、他に、選集『森本哲郎　世界への旅』(全10巻·別巻1、新潮社刊)がある。最近刊は『日本·日本語·日本人』(大野晋氏、鈴木孝夫氏との共著、新潮選書)。

China

・韓栄恵（ハン・ヨンへ）女士は、現在韓国のハンシン大学助教授。1956年生まれ。ソウル大学で英語教育を専攻され、その後同大学院に進学され社会学を専攻。その後筑波大学に留学し、1991年同大学院を修了、社会学博士の学位を取得された。2001年からはミシガン大学日本研究センター客員教授を務められた。日本の社会構造、社会運動、社会意識に関する研究を専門としておられ、主要業績としては、『日本社会概説』(ハンウル出版社、2001年)、『日本の都市社会』(共著、ソウル大学出版社、2002年)、「日本における"市民運動"思想の形成」(2001年)、「日本の市民社会の変化と女性の政治的進出:無党派女性市長の誕生過程を中心に」(2002年) 等がある。

China 此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

グローバル化の中の東アジアと日本研究（講演要旨）

青木保

はじめに

現在東アジアはひとつの地域として歴史上初めてといってよい相互的な交流の時代を迎えている。現在その中心は何と言っても経済交流であるが、文化と人の交流も大変盛んである。古代以来のアジア大陸の文明は中国で巨大な達成を見たが、その大きな影響下に東アジアの国と社会は発達し、それぞれ固有の文化を形成した。いまそこには独自の文化伝統が存在している。今日東アジアの国と社会を研究する場合、それぞれの国・地域・社会が独自の文化を発展させている事実の認識を基本にすえて研究を進めることが第一に求められる。「日本研究」もその認識の上にたって展開されなければならない。とくに近年顕著に見られるようになったように、グローバル化の中で東アジアが表面的に大変類似してきた現象が際立つ状態の中で、各国・各地域に対する「異文化研究」としてのきめの細かい観察と考察が要求される。

「日本研究」もこうした状況において、一段と「異文化理解」と「相互理解」という視点から発展されることが必要である。そして、「日本研究」は「東アジア」という地域的な広がりの中での「相互交流」の流れの中で基本的に把握され展開されなくてはならない。個々の専門的研究は、それ自体独立的に行われることは必要に違いないとしても、こうした意識と視野をどこかに持つことが重要である。すなわち、「比較」的な観点を有するかどうか、これが研究者の意識においてしっかりとした基盤を持つことが肝要である。

しかし、こうした意味での「日本研究」は、現実にはさまざまな面でいま困難な状態にある。私は、とくに東アジアにおける「日本研究」の主要な研究分野として、第二次世界大戦後の日本の国家・社会・経済の発展の中における「文化と人間」の問題をさまざまな角度から検討し、東アジアの戦後の中に位置付ける学問的作業がいま求められていると考える。こうした点について、以下本講演では簡単にではあるが、述べてみたい。

一、「進化する日本研究」とは

まず主催者から私に要請された講演題名、「進化する日本研究」は日本語としては少し違和感がある。「進化」は自然科学的な現象によく使う用語であり、「日本研究」であるならば「日本研究」の発展、展開、進展などの方が解りやすい。「進化」はこういう場合、現代日本語の

China

感覚で言うと、間違いではないが、「進化論」の意味が被さるので、違和感がある。少なくとも、私個人にはそう感じられる。こうした些細なことに思える事象が大きな誤解の原因になることがあるので、日・中間においてもまさに相互理解の問題として注意する必要がある。

二、グローバル化と地域研究の危機

今日、地域研究は決して盛んであるとはいえない状況にある。とくに社会科学における「地域研究」の位置は下降の傾向にある。アメリカの社会科学研究でよく指摘されることであるが、研究室で世界中から集められた統計資料を中心にして組み立てられた「モデル論」で地域の問題は解決できるといった方法論的傾向が、たとえば「合理的選択」理論といった形で、支配的になった。それが社会科学における「地域研究」の空洞化をアメリカでまねいている。現地の言葉や文化を学び、実地調査、現地での資料収集などを主体とする研究の軽視が、アメリカの90年代に言われた「経済一人勝ち」とソヴィエト崩壊による「敵」の消失によりアメリカ・モデルが万事支配するという強い確信を生み、社会科学においても「単独主義的」な傾向を作り出した。また「地域研究」は基本的に「戦略的」であることもあって、経済低迷に喘ぐ「日本研究」には関心が集まらず、「日本研究」の危機をまねいてもいる。しかし、今日ほど国と国、地域と地域、人と人、宗教と宗教、文化と文化、の間の相互理解、コミュニケーション、対話、の必要が求められる時代もかつてなかったのである。グローバル化は、人類史上初めてといってよい異文化間、国家間、地域間、地球上の人間どうしの多面的な接触をもたらしつつあり、これまでとくに深く知る必要のなかった人々の間に相互理解の必要性を生じさせた。アメリカでの傾向とは逆にいまやグローバルな世界を理解し国際・地域関係を平和的に友好的に築くためにも「地域研究」は欠かせないのである。とくに東アジアにおいては相互理解の基礎としての「地域研究」を何にもまして促進させる必要がある。「文明の衝突」（S．ハンチントン）そしてさらに「グローバリゼーションの衝突」（S．ホフマン）が指摘され、また「文化の多様性の擁護」（ユネスコ・国連）が宣言される現在、このことは深く認識され、さまざまな形で実行に移されるべきことである。

三、新たな「地域研究」の必要性

こうした状況にあって最近の「日本研究」における注目すべき研究として、J．ダワー『敗北を抱きしめて』（岩波書店、2001年）の示すものについて簡単に触れて見たい。

この研究は、敗戦直後の日本人がいかに敵戦を受け止め、新しい国家と社会を創ろうとして生活し、理想を求め、生きていたか。さまざまな日本社会の動きを、さまざまな階層・職業・レベルを相対的に捉え、詳細に追求した。日本、日本社会・国家、日本人を単一に捉えるのではなく、多様な視点から捉えようとした画期的な研究である。Japan, Japaneseでなく、Japans, Japanesesという捉え方。しかし、それが最後には「総括的・全体論」的な見方と視点を示すこととなっている。今日の「東アジア」において、この研究視点は十分考慮に値すると思われる。何よりも歴史と現代における多様な人間の動きとあり方を細部において追究し、それを全体的な時代の流れと枠組みの中に位置づけることが望まれる。

China

四、「外部の視点」の問題

「異文化理解」を基本にすえる「日本研究」がいま必要である。これは必ずしも従来はっきりと認識されてこなかった問題である。「東アジア」における「異文化」としての「日本」の理解という観点である。それは当然のことながら、細部を押さえる事を可能にするだけでなく、必然的に「比較」的観点が入ることによって、全体的なホーリスティクな見方が導入される。それはまた「内部の」者には自明なことに「問題」を見出だすことにもなるので、意外な事実を発見する可能性をもつ。「外部・他者」のはっきりとした「視点」の重要性を認め、それを「研究」の出発点とすること、「ストレンジャー」の視点である（A．シュッツ）。

五、第二次世界大戦後の「日本研究」

社会文化の研究における、R．ベネディクト『菊と刀』(1948)の意味を若干考えてみたい。この研究は何よりも「全体論」として日本文化・社会を捉えることを目的としている。アメリカ(西欧)人にとってもっとも遠く未知の存在である敵としての日本と日本人の研究。戦時中の対日戦略的研究であるが、深い洞察力を示す。キー・コンセプトとしての「集団主義」と「恥の文化」は戦後日本の「日本文化論」の基本的関心を形成した。「敵」としての「日本・日本文化・社会」の研究であるが、そのアプローチは「相対主義的」で、あくまでも「西欧・アメリカ」との違いに基づく「異文化・他者」としての「日本研究」でありながら「西欧・自文化」からの独善的な見方を可能なかぎり排そうとしている。日本の「敗戦」からの復活と発展を予見もしている。専門家からの批判は多く、確かにいろいろな問題点はあるものの、それまでこのような研究は日本人によって為されていなかったし、その「全体論」的アプローチは「外部の視点」というものの意味を端的に示す。

戦後日本文化・社会をどう捉えたか。ベネディクトのキー・コンセプトがいかに日本人による「日本研究」に反映してきたか。「タテ社会論」と「世間体」から「集団主義」と「恥の文化」などいわゆる「日本文化論」への影響は否定すべくもない。

私はかつて1945—83年の間の「日本文化・社会」論が示す傾向を分析して、3期に分けた。1.「否定的特殊性の認識」(45－54)、2.「歴史的相対性の認識」(55－63)、3.「肯定的特殊性の認識」(64－76，77－83)、そして84年以後を「特殊から普遍へ」とした（大体90年まで)。いま日本は「構造改革」を大きな国家的・国民的課題としているが、困難な問題の基底には日本的な「集団主義」と「恥の文化」の問題がある。「構造改革」の問題へも「外部の視点」での「全体論」的見方と分析そして提言が必要である。

六、地域のつながりの中での「個別研究」

「世界史」から「グローバル・ヒストリー」への流れは、21世紀の初めにあたり当然の学問的な動きに違いない。西洋化—近代化からの世界史的視点ではない地域中心の視点から捉えたグローバル史——多極的視点の導入は必然である。

地域のつながりを視点におく「日本研究」が求められる。西欧・アメリカ的近代的視点ではない研究、そして、自国・自地域からのみ見た研究ではない「相互理解」的視点による研究の重要性を重ねて指摘しておきたい。近年、日本で日本語による中国人研究者による注目すべき

China

二つの研究が現れた。その一つは、厳安生『日本留学精神史』(岩波書店、1991年)であり、いま一つは、王敏『宮沢賢治、中国に翔ける想い』(岩波書店、2001年)である。

1. は「近代中国知識人の軌跡」と副題されている。甲午(日清)戦争後の1896年に始まる日本への中国人留学生の日本体験とは何だったのか。1910年代(清末)までを扱う。「文明母国」(中国)と「進取して止まぬ母国」(日本)との間で動乱の時代にあって両国の置かれた国際的・国内的状況の中で、その相克と葛藤に苛まれる留学生たちの精神を見事に描き出し、日中両国の近代の問題を浮き彫りにした。
2. は近代日本の代表的な詩人・文学者宮沢賢治の詩的イメージと創造力の大きな源泉となったのが、中国の文学や文化であったことを詳しく作品に即して分析した。賢治論は山ほどあるが、これだけ克明に中国文化とのつながりを追ったのは珍しい。画期的な賢治論であり、あらためて日本と中国との文化関係の深さを明らかにした。

他にもさまざまな研究があるかとは思うが、私の目に触れた注目すべき業績として、以上二つの研究をあげた。

こうした研究が現れると、この地域における「文化関係」の問題がはっきりと出てくる。古来、歴史的には中国文化の影響は歴然としたものがあったのは、誰しも認める事実には違いないが、近代における「文化関係」についてはあまり注意を払ってこなかった。アジアにおいて近代国家・社会をいかに作り上げるか。この問いに答えるべく留学生たちは自分たちの置かれた状況と格闘し、ある者は敗れ、ある者は成果をあげた。日中関係の近代的基礎の一つは本来そこに置かれなくてはならないと思われる。

イギリスの作家E. M. フォースターは大事なことは「結びつけること」(ONLY CONNECT)と記している。これは別の事柄についての評言であるが、「日本研究」にとっても、本質的な課題である筈である。

七、「日本研究」にとっての最大の課題

日本研究一般においては、さまざまな専門分野が存在する。それらは、たとえば以下のような分野が一般的に考えられるであろう。

1. 自然科学的研究
2. 歴史・古典研究
3. 社会科学的研究
4. 社会・文化研究
5. 現代社会・文化および現代社会史・文化史の研究

この研究分野は、私の専門からみてもとくに重要であり、日本と中国の関係を考えると今後もっとも力を入れるべき分野に思われる。それは、(a) 何よりも「実態調査」に基づく研究・フィールドワーク研究、(b) インタビュー・聞き取り・オーラルヒストリー、(c) 資料収集:あらゆる出版物・広告・雑誌・映像など、(d) 生きた視点、同時代的アプローチ、(e)「自文化」と「異文化」という問題意識をふまえて、文化・社会の異質性と類似性を捉える、(f)「個別研究」を通しての「全体論」、(g)「外部の視点」の尊重と「内部の視点」の理解によって成し遂げられる。

China

八、グローバル化の中の「東アジア国際社会」の成立へむけて

「国際社会」から「グローバル社会」の成立へ向けて行こうという問題意識を持つことを改めて強調したい。欧米中心の現在の「国際社会」だけではない、東アジアの「国際社会」をつくる必要がある。それには何よりも地域中心の「国際社会」から「グローバル社会」が生まれるという認識を持つことが大切である。グローバル化の中の東アジアにおける各国·各社会の研究は、「東アジア国際社会」の成立に向けて、それを目的の大きな中心において進めなければならない。いかなる「個別·専門研究」においても、こうした大きな目的をもつことの重要性が、もっと強調されてよい。いま、私たちは、「東アジア国際社会」の成立にむけて、何よりも互いに「異文化」として「相互理解」に努めることを、基本に据えた「日本研究」を発展させる義務があると思う。それだけではない。それは中国における「日本と韓国」の研究、また日本における「中国研究」「韓国研究」、韓国における「中国研究」「日本研究」も同じである。三国が協力して「東アジア国際社会」成立のための「地域研究」の発展に邁進するところに「東アジア」の明るい未来が拓ける。

九、「アジアを語ることのジレンマ」

しかし、そこには多くの難問があることも忘れてはならない。孫歌氏の『アジアを語ることのジレンマ』(岩波書店、2002年)には、次のようなことばが引用されてある。「二十世紀を生きた大部分の東アジアの人びとは、いずれも大国の夢に取り付かれていた」(白永瑞)「大アジア主義」(孫文)「大東亜共栄圏」(戦前の日本の国家的スローガン)などである。いまこそこうした意識とことばに囚われることなく「アジア」の中の「東アジア」そして日中関係を冷静に見つめる必要がある。そこで改めて「グローバル化の中の『東アジア』——『東アジア』を中国·韓国·北朝鮮·日本とする」を見つめたいと思うのである。(東南アジア諸国をふくめた広い「政治·経済」的概念はここでは採用しない。)

「東アジア」を語ること、これは研究者にとってだけでなく、一般の人々にとっても、実は大きな難問にちがいあるまい。しかし、いまや、その「東アジア」から「アジア」を語り、世界を語り、グローバル化を語らなくてはならない時代を迎えている。そのための「地域研究」であり、「日本研究」が求められる。

本日、ここに新しい研究棟の完成を間近に控えて、この研究センターがまさに以上のような要望に応えるアジアと世界における「日本研究」の一大中心として発展することを、心から期待したいと思う。まさに国と地域と人を「結びつける」役割を学術文化の面で果たしていただきたいと強く願うものである。

(政策研究大学院大学)

China

文化翻訳の“路線”に関する思考

厳安生

文化の“翻訳”が可能かどうかの問題は，当センターにとって宿命的な問題でさえある、とレジュメの冒頭で申したのは，中日間の共同事業として少なくとも二つの文化間で仕事をしている私達にとってみずからの存在根拠にかかわる大問題に思えるので、おのずから真正面から解答に取り組まずにおかないと感じたからである。しかし、よく考えてみれば，両の言語がその背後の違った地域、違った歴史、違った文化伝統と文明の形態の媒介としてお互いにぶつかり合い，睨み合い，そして転換するかしないかできるかできないかと緊張に対峙していること自体，それは典型的な文化的事件でなくて他の何でありえよう。そして，そういった緊張関係のなかで異文化間の交流と翻訳が行われてきたこと自体すでに上述の問いに答えを出しているのではないだろうか。

このとおり自明なことがそれでも問題として提起されたことは，ですから，なにか私達の無意識のうちに潜んでいるより深くて真実な宿命性が暗示されているのではないか，と思う。後に見るが，中国的すなわち中国文化本位性に特有な，中国近代翻訳史の宿命であり，上記命題の提出に関与した私も含む一、二世代のいわゆる“外語工作者”に共通した宿命でもある。それを考えるために，一部学界の議論にも啓発を受けて，私は魯迅に戻ることにした。ご存知のように，魯迅は前世紀の二十年代から三十年代にかけて翻訳の問題に関して大量の論戦と論述をした。それに戻って再読してみたら，案の定，ある歴史の筋がみえてくるのだが，本日は（一）厳復と林紓，（二）魯迅三題，（三）残されたままの問題，という三つの点にしぼって話をしてみたい。

（一）　第一点，中国近代の翻訳史は厳復と林紓の二人によって端を開かれたことは今さら他言を要すまい。ただ，一つだけ，二人に共通した特徴を挙げるとすれば，翻訳の不正確ということになろう。それは，いままでに往々にして語学力とか翻訳の巧拙とか，厳復についていえば彼の提出した「信・達・雅」の三文字経典の実践の問題と位置付けされがちだった。しかし，そもそも外国語など解りもしない林紓は，まず問題外になろう。そのかわり，彼の人の口述にたよって得意な——文体史上「桐城派文章の最後の輝き」と評されるほどの——古文にアレンジした二百数十の欧米風の小説は，胡適から魯迅から郭沫若に至る近代文豪の誰ひとりとして，その功績を褒め恩恵に感謝しないものはなかった。厳復の伝えた社会ダーウィニズムの中国近代の進化過程に果たした起爆剤的な役割も，永遠に歴史に残っている。ただ，違うの

China 此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com